

英雄はいかに作られたか

——『桃太郎』『将軍』からみる芥川龍之介の戦争観——

出口 寿々々

序論

『桃太郎』は一九二四年（大正十三年）七月一日発行の『サンデー毎日』夏期特別号に発表された小説であり、のち辰野隆・山本有三・豊島与志雄・山田珠樹編纂の『白葡萄』に収録されたものである。『芥川龍之介事典 増訂版』^①によると、この作品はおとぎ話の「桃太郎」を作者の視点からパロディー化したものとされている。また、『芥川龍之介新辞典』^②では、「日本帝国主義のアジア侵略を批判して、桃太郎に仮託して描いた小説」であり「日本帝国主義を批判したことは明白」と評されている。しかしこのような評価がされてきた一方で、先行研究はほほほに等しい。

本稿では芥川龍之介『桃太郎』について、芥川が『桃太郎』をこのように改変して書いた意図は何か、この物語から何が読み取

れるのかを考えたい。さらに、昔話「桃太郎」の成り立ちと話型を調査し、「桃太郎」が昔話からいかにして戦争批判のプロパガンダとなったのかについて整理する。ここから桃太郎が軍神として日本人の無意識下に神格化されたのではないかという問題提起をし、芥川龍之介『将軍』について、神を作り上げ心酔し軍神を中心に統率する周囲への批判的物語として再考をしたい。

一章 芥川龍之介『桃太郎』考察

一 桃の木とヤタガラス

まず桃についてシンボル性、言い伝え等の様々な方向から考えていく。『世界シンボル辞典』^③によると、桃は形が臀部に似ていることから女性の象徴であり、子供が生まれてくる場所、生命の象徴とされている。また桃は邪気を払う魔よけの果物であるという

言い伝えがある。

次に作品冒頭から、桃の木が何を表すのかについて考える。「大きいとだけではない足りない」ほど大きく、雲の上にまで広がる枝と大地の底まで伸びる根を持つ、ということから桃の木は世界樹であると考ええる。この巨樹は宇宙の中心にあつて、地中深くに根を伸ばし、天高く枝を広げ、地下と地上と天とを結びつける他界への通路となり、人間の魂はそれを伝つて他界へと赴く⁽⁴⁾。つまり、桃の木が世界樹であるならば桃太郎は人間であるといえる。また、「黄泉の国にさえ及ぶ」根が伸びているという事は、桃がなるのは天国でも桃の中には黄泉の国の養分が詰まっていると考えられるだろう。『桃太郎』において黄泉の国へと向かう者達について考える。作中において黄泉の国へ行った者達は、酒顛童子・桃太郎に侵略されて虐殺された鬼・鬼の復讐によって死んだ雉や猿であり、全員が何者かに殺されている。今作における黄泉の国には殺された者達の復讐心が満ちているのではないだろうか。その黄泉の国からの養分が詰まった桃から生まれた桃太郎の中にどのような性質が眠っているかは明らかである。

二 登場人物

次に芥川龍之介『桃太郎』における登場人物、特にお爺さんお

婆さん・桃太郎・お伴の三匹について、何をあらわしているのかを考えたい。

山・川・畑での労働で生活しているお爺さんお婆さんは労働者の立場である。また、「老人夫婦は内心この腕白ものに愛想をつかしていた」とあり、桃太郎の思想とは相反する立場にいることが分かる。一方で桃太郎の方も「お爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだった。」とありお爺さんお婆さんのような生活を嫌っていることが分かる。桃太郎が鬼が島へ「征伐」へ向かうのは、資本主義での発展が望めなくなったために他国へ向かい植民地を増やすという帝国主義・植民地主義の構図そのものだ。以上、お爺さんお婆さんは労働者の立場を表し、桃太郎は帝国主義・植民地主義をあらわすことが分かった。芥川は双方のメリットとデメリットを冷静に理解し、その構図を『桃太郎』へと落とし込んだのだ。

次に三匹のお伴について考えていく。犬について本文では食べ物に飢えていて強情であること、頭が鈍いこと、短気であること、猿と仲が悪いことが描写されている。猿は『さるかに合戦』の猿であるとされている。意気地がないこと、勘定に早いこと、腹が減ると不服をとなえること、欲が深いことが描写されている。雉は、もつともらしい事を言うことが本文中から分かる。犬をなだ

め猿に主従の道徳を教えていることから、知識があり他の二匹とは違った立場である。以上のことから、犬と猿は双方とも飢えていて強情であることが分かった。犬は頭が鈍く猿は意気地がない。知識が無く勇氣もないため、この二匹は桃太郎のように自ら行動することはできないのではないだろうか。よってこの二匹は「飢え」を中心にして考え、思想を理解しないままで指導者に従って戦う存在であるといえる。一方雉には知識がある。雉は他の二匹とは違って桃太郎の思想を理解していたといえる。桃太郎に従って資本主義から抜け出すことを望んでいるとも考えられる。さらに考えると、つまり犬と猿は軍隊の兵士達そのものであり、雉は戦争に突き進んでいく日本を知識で支えていた知識人達そのものなのである。

三 連鎖する復讐

この物語には多くの「復讐」が描かれているといえる。その数々の復讐について考えたい。

『桃太郎』では、人間側には酒顛童子が退治されたのは都に出ては婦女や財宝を奪ったからであると伝わっているが、鬼が島では酒顛童子は理不尽に人間に殺されたとして語り継がれており、子供の鬼への教育に使われているようである。本文には「鬼が島の

独立を計画するため、椰子の実に爆弾を仕こんでいた」とあるので、鬼が島は現在桃太郎の統治下にあり植民地化していると言え、さらに鬼達は独立にむけて準備中であることが分かる。鬼がヤシの実爆弾を使って起こす独立戦争には復讐戦争の意味が込められるだろう。戦争が起これば人間側も鬼側も何人もが殺されることになり、そこにはまた復讐の種が生まれていくのである。

ここで鬼が島に関する本文中の描写から鬼が島が何を表しているのか考えたい。本文からは南国であったことが分かる。当時日本が侵略した外国の島は台湾・南洋諸島の島々であり、鬼が島と桃太郎の関係性は、正に日本と日本に植民地化された台湾や南洋諸島の島そのものなのだ。芥川は、日本が植民地化している島々に芽吹く復讐の種について、いつかの萌芽へと警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

作品最後は「未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている」としめられる。桃からはまた「英雄」が生まれるようである。次また桃太郎のような「英雄」が生まれた時、そこには再びの戦いと復讐の連鎖が生まれるだろう。歴史は繰り返されるのだ。

戦争によって他国を占領し理不尽な要求を押し付けて奢る日本と、五四運動など、学生が立ち上がり権利を主張した中国双方を

芥川は冷静に俯瞰していた。平和に暮らしていたのにある日突然、虐殺される鬼とは、戦争で侵略される他国であり、犬猿は正義を振りかざして暴走する日本軍そのものだ。そして、日の丸の扇を振りかざして鬼が島を侵略する桃太郎こそが、帝国主義の日本そのものなのである。

二章 昔話「桃太郎」

一章では、芥川龍之介『桃太郎』が戦争批判の物語であると考察した。様々な視点で戦争を見たとき正義などはどこにもないということを理解し、また、戦争における英雄は意図的に作り上げられた虚像であるということについても考えを深めた。二章では、英雄を作り上げることについてその意味と理由について詳しく考察したい。まず「桃太郎」の成り立ちと話型、国定教科書掲載時の「桃太郎」について整理し考察していく。「桃太郎」が時代ごとに誰のための物語であったのかを考え、そこからプロパガンダとして利用された昔話についての考えを深めたい。また、国定教科書に掲載された「桃太郎」について物語の考察を行い、日本人の戦争観に根づく「作り上げられた英雄」とそこから生まれる意識について考えていく。

一 「桃太郎」の成り立ちと話型

昔話「桃太郎」について確認していききたい。物語の発生は不明、口頭伝承での成立は室町時代といわれているが正確な事は不明である。江戸時代になると書籍に残されるようになり、初期の赤本『むかしむかしの桃太郎』や曲亭馬琴の『燕石雑誌』を初めとして、豆本・黄表紙・青表紙などに数多く残される。同類の話は全国に二六ヶ所もあり、中国・インド・台湾でも語られている。昔話「桃太郎」の成り立ちには様々な説があるが、岡山県吉備地方に伝わる「吉備津彦のウラ退治」説と、愛知県犬山市に伝わる「稚武彦命伝説」説がある。この二つについて整理し、昔話「桃太郎」の根幹とは何であったかについて考察する。

岡山県吉備地方には「吉備津彦のウラ退治」という物語が伝承されており、昔話「桃太郎」の成り立ちとなった話と考えられている。「吉備津彦のウラ退治」とは、室町時代に記された吉備津神社の社記によるとされるものであり、吉備津彦野命が弟の稚武彦命と、讃岐にいた倭迹迹日百襲姫命を訪ねた時、近海に鬼大王という海賊が出没して良民を苦しめているという話を聞き、吉備津彦野命は犬飼建命、楽々津森彦命、留玉臣命の三人の家来を連れて鬼大王を征伐したと伝わる逸話である。

次に「稚武彦命伝説」について確認する。「稚武彦命伝説」とは、

愛知県犬山市に伝わる、吉備津彦命の弟、稚武彦命の伝説である。「吉備津彦のウラ退治」伝説を元にしたものであり、派生ととらえられる。稚武彦命は船で讃岐の姉（倭迹迹日百襲姫）を訪問の途中、地元の娘と出会い、その家の婿養子となつて讃岐に住んだと伝えられており、鬼無町の東北（鬼門）にある女木島に住む鬼が悪さをして村が困っているのを鬼の温羅を退治に行つたと伝えられている。

以上の二つの伝説の考察の前に、『口承文芸史考』⁵⁾から昔話の定義について確認したい。昔話の定義は「昔々ある処に」という類の文句をもって始まり、話の句切りごとに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの語を付して「いることである。「吉備津彦のウラ退治」は「むかしむかし」から始まり、物語の途中には「したそうです」といった文言が多く見られる。「稚武彦命伝説」については正式な語りが残っていないが、「吉備津彦のウラ退治」の派生であるため、同じ類であるといえる。つまりこの二つは昔話といえる。

ここから昔話がなぜ出来上がるのかについて考えたい。藤本朝巳氏は昔話ができあがる理由について、昔話は人のためにできるのだと語っている。障害のある子が生まれた場合に家の中で隠して育てるのが一般的であったが、そこから出来上がったのが「座敷童子」である。つまり昔話の根底には「村人の為に生まれる物

語である」というものがある。以上のことから考えて昔話桃太郎の原型は、鬼が退治される話ではなく鬼を退治するヒーローの話であったと考えられる。

昔話「桃太郎」はここから様々な話型に分岐する。①岡山県高梁川流域から備後地方②東北地方③徳島県東祖谷山村④香川県高松市鬼無町の四つについて考えたい。

①岡山県高梁川流域から備後地方、③徳島県東祖谷山村、④香川県高松市鬼無町の「桃太郎」は、「山行き型」「寝太郎型」という話型である。「山行き型」とは、成長期を詳しく語るものであり、比較的ユーモラスに描かれる事が特徴である。①岡山県吉備地方の「桃太郎」には鬼退治という行為がない。桃太郎という青年が山仕事を切り抜けようと考え、結果として家を吹き飛ばしてしまふというユーモアのある内容になっている。原型とは違いヒーローとしての側面はもっておらず、物語のさわりは家が吹き飛ばされる場面である。③徳島県東祖谷山村の「桃太郎」にも鬼退治という行為は存在せず、物語のさわりはお爺さんとお婆さんが死んでしまふ場面である。②東北地方の「桃太郎」には鬼退治の場面があるが、鬼退治の場面についての詳しい描写はほぼ無いに等しい。物語のさわりは箱の中に入った桃が川から流れてくる場面である。東北地方の話型には、川で拾った箱を開けると中に小さな男の子

が入っており育てると通常の子供の大きさに成長する、というパターンもあるが、ここでも話のさわりは箱の中に男の子が入っていて子育てをする、という部分である。④香川県高松市鬼無町の「桃太郎」には鬼退治の要素があるが、退治というものではなく決着は相撲で決まり、ユーモアのある内容となっている。以上を踏まえ考えると、村に悪さをする鬼を退治して平和をもたらすヒーローの話であった原型から変化が見られる。前述した昔話ができあがるのは村人のためであるという考察をふまえても、口頭伝承での昔話は村人の娯楽のためにあつたと考えられる。

昔話「桃太郎」は、江戸時代になると書籍に残されるようになる。題名は「桃太郎宝蔵入」種類は赤本である。江戸時代草双紙「桃太郎宝蔵入」は「回春型」「妻まぎ」の物語である。「回春型」とは、桃から男の子が生まれるのではなく、桃を食べたお婆さんが若返り、男の子を孕む、という話型のことであり、草双紙では桃を食べたお爺さんお婆さんが若返り出産する型が主流だった。また、「妻まぎ」の話型とは、物語の終わり主人公が妻を迎えて生活を送る話型のことである。回春型になったことで現実味が増し、読者であった大衆に受け入れられやすくなっていると考えられ、また、大衆の大きな問題であった結婚問題を物語に入れることで親近感を覚えさせているといえる。桃太郎が鬼ヶ島へむかう理由に注目

したい。本文には村に悪さをしているといった記述は特になく、「征伐」や「退治」といったような記述も見られない。桃太郎は、宝のある鬼ヶ島へただ向かう、ということになる。つまりこれは鬼退治の話ではなく、桃太郎の冒険譚なのである。以上のことから、「桃太郎」はここでより現実感と親しみをプラスし村人の娯楽から大衆の娯楽へと変化し、さらに純粋な冒険譚としてあつたことが分かる。

最後に国定教科書尋常小學国語讀本巻一に掲載された「モモタラウ」について考えていく。「モモタラウ」は「一般型」「果生型」「鬼退治型」の話型である。「果生型」とは、桃太郎が桃から直接生まれてくる話のことであり、「鬼退治型」とは、桃太郎が成長したあとで鬼退治へ向かい帰ってくる、という話のことである。そして桃太郎が桃から生まれ、成長するにつれて強くなり、犬猿雉を仲間にして鬼ヶ島で鬼退治をして帰ってくる、という物語の一連をまとめて「一般型」と言う。本文には「オニドモ」という記述や「オニセイバツ」という記述があり、ここからも分かるように鬼が明確な悪であり、この時点で「桃太郎」は勧善懲悪の物語として世に流布していたことが分かる。

昔話「桃太郎」は村を救うヒーローの話から村人の娯楽へ、そして大衆の娯楽へと変化し、国定教科書に掲載されてからは勧善

懲悪の物語としてあったことが分かった。二章・二ではさらにその先、国定教科書に掲載され、爆発的に国民に浸透していった昔話として、そしてそれゆえに戦争のプロパガンダとして利用された昔話として「桃太郎」をみていく。

二 昔話はいかにしてプロパガンダとなったのか

国定教科書に掲載された「桃太郎」はこの時点で勸善懲悪の物語へと生まれ変わったが、なぜそのようなに変更されたのだろうか。整理してみると、一つの可能性が見えてくる。つまり桃太郎は、戦争は勸善懲悪であり日本は正義であり、戦争に勝てば宝物がもたらえて豊かになれるという植え付けのための物語であるといえるのだ。国定教科書への採用が、昔話桃太郎を「戦争のための童話」へと変化させたのだ。

ここからはどういった経緯を辿ってプロパガンダとして浸透したかをみていく。戦争のプロパガンダとなるためには、昔話桃太郎という話型が国民に浸透してはならない。国民に現在の形の桃太郎が浸透したきっかけとして、国定教科書に注目したい。昔話桃太郎が収録されている教科書は一八八七年（明治二〇年）尋常小学校読本からほぼ全てである。国定教科書で一気に果生型・鬼退治型・一般型の昔話桃太郎が浸透したといえる。

さらに「桃太郎」は尋常小学校用の唱歌の教科書である「国定教科書唱歌」に一九一一年の時点で掲載されている。二番の「征伐に」、四番の「一度に攻めて 攻めやぶり つぶしてしまえ」、五番の「のこらず鬼を 攻めふせて」といった歌詞に注目すると、物語の桃太郎よりも、敵を攻めるという色が濃く出ていることが分かる。さらに、「おもしろい」や「ばんばんざい」など、敵を攻め勝利した結果、おもしろく、万歳な状況になるという刷り込みの効果がみられる。

「桃太郎」は国定教科書に掲載された時点で勸善懲悪の物語へと生まれ変わった。そこには戦争を正当化し戦意高揚を煽る為の仕掛けが見られ、唱歌や映画もまたプロパガンダとして利用された。また巖谷小波『桃太郎主義の教育新論』から、「桃太郎」が教育に利用されていたことも分かる。「桃太郎」は当時の戦争を正当化する、生き方を指南する、まさしく「教科書」であったのだ。

三 昔話「桃太郎」考察

日本人の戦争観の根底にあるものについて考えるために昔話桃太郎について考察していく。ここで扱う「桃太郎」は、一番世に親しまれている一般型・果生型・鬼退治型であり、また日本国民に対する影響力が一番強かったと考えられる尋常小学校教科書の

ものとする。

まず、川から桃が流れてくるということについて考えたい。冥土には、三途の川というものがある。川が境界の象徴であることから、昔話桃太郎における川とは、この世とあの世をつなぐものだと考える。また、芥川龍之介『桃太郎』で桃が不死の象徴であると考察したことから、川から桃が流れてくるということは、天国から誕生した者が人間界へ降りてきたと考えられる。さらに「桃太郎」の異常成長性にも注目する。この「桃太郎」の異常成長性に関しては柳田国男も「桃太郎」について「急速に成長して人になった」「小さき物語」であると語っており、「驚くべき成長」は神の子だからなのだと考察している。⁽⁷⁾ 天は時間がゆっくり流れていることから考えて、桃太郎には天の時間が流れているために、人間界で急速な成長を遂げたのだと考えられる。

「桃から生まれる」と言う事について考えたい。桃から生まれたという事は、桃太郎には桃の霊力が宿っていると見えるだろう。『桃太郎像の変容』⁽⁸⁾で滑川道夫氏は、「桃太郎は「桃太郎の異常誕生逸話」と「鬼ヶ島征伐」の二部構成から成り立っている」と指摘している。両者をつなぐものこそが桃なのである。さらに、「前者では偉大な呪力を持つ英雄桃太郎が説かれ、後者では桃太郎の呪力が鬼ヶ島征伐で発揮されたことを書いている。」と語る。つま

り、「桃太郎」は桃太郎の霊力を客観的にみている物語であると言える。

次にお伴の犬猿雉について考える。ここではお伴と桃太郎が対等な関係ではなく主従関係であるということに注目したい。江戸時代の赤本「桃太郎宝蔵入」には、三匹について「お伴」と言う記述はなく「仲間」との記述である。しかし国定教科書には「お伴」の記述があり、三匹に宝物の車を引かせていることから考えても主従関係である。つまり「お伴」は桃太郎と共に同じ目線で鬼退治をして宝物を得るのではなく、鬼退治をする桃太郎につき従い、宝物を分けてもらう立場であるといえる。つまり「桃太郎」は、桃太郎が鬼退治を「してくれる話」であるのだ。

桃太郎は鬼の宝物を持って故郷に凱旋することになる。結果として村には財がもたらされることになるが、ここでも村人たちはあくまで部外者であり、桃太郎が村に財をもたらして「くれた話」である。つまり昔話桃太郎は、異界から来た子供が鬼を退治して「くれる話」であるといえる。

ここで語り手と読者の関係性を考えたい。「桃太郎」は、桃太郎が語り手ではない。語り手が桃太郎でない以上、読者は桃太郎を客観的にみるしかない。これはお伴と同じ視点であるといえるのではないだろうか。この意識が、戦争における日本人庶民の戦争

観の根底にあると考える。英雄を作り上げ、まつりあげ、それに心酔して付いていくことで統率するという独特の性質、これこそが日本人の戦争観なのである。

三章 芥川龍之介『將軍』

では、現実世界において「英雄」となったのはどのような人物であったのか、歴史を確認し軍神についての理解を深めたい。さらに、芥川龍之介『將軍』を考察し、芥川龍之介が当時の軍神、乃木希典をどのように描いたのか考えていく。

『將軍』の初出は一九二二年（大正十一年一月）に刊行された雑誌『改造』であり、芥川龍之介が中国から帰国した後早い時期に書かれた作品である。芥川の作品では珍しく多くの伏せ字があり、芥川龍之介自身が「官憲は僕の『將軍』と云う小説に、何行も抹殺を施した」と記しているほどである。⁽⁹⁾

先行研究は島田昭男の作品論をはじめとして総じて批判的だが、菊池弘氏は『芥川龍之介辞典』⁽¹¹⁾で「作者はこの作品で乃木將軍の偶像破壊を試みている」と評価している。また、浅井清氏は『名著復刻芥川龍之介文学館』⁽¹²⁾の中で「偶像破壊の鋭さよりも美意識の違和感」に論点のある「知的憂愁を漂わせた佳品」と評価した。張蕾氏は『芥川龍之介と中国―需要と変容の軌跡―』⁽¹³⁾で「芥川は

兵士の立場に立って、戦争の不条理を訴えている。」二章では「中国人殺戮を躊躇う下級兵士の姿も描かれており、殺される中国人の悲劇も重ねて読み取るならば、確かに〈反戦小説〉と位置づけることができる。」と評価しており、「反戦小説」としての読み方を提示している。

一 軍神

まず当時軍神としてまつりあげられた人々について理解する。ここでは軍神の誕生として語られる廣瀨武夫について考え、乃木希典についての理解を深めたい。

廣瀨武夫は旅順口閉塞作戦⁽¹⁴⁾で功績をあげ、そして戦死している。部下を探しに沈み行く船に戻ったという廣瀨武夫の最期は決して華々しいものではなかったが、人々に深いインパクトを残した。当時の新聞には「殊に其戦死は、其部下の一人を救はんとするがために起りたり。部下の一人の死を見るよりも、自ら進んで之に死せり。（中略）中佐が日本武士の魂はこれぞと示したる其行為其死、是既に日本に対する大功なり」と書かれている。以上のことから、廣瀨武夫が軍神になりえたのは、華々しい功績ではなく「大和魂」をその生き方に示したからと言える。

次は乃木希典について、なぜ軍神となりえたのかみていく。乃

木は、長州藩士の陸軍大将である。のちドイツに留学し軍制・戦術を研究。台湾総督を経て日露戦争には第三軍司令官として旅順攻略を指揮。一九一二年（大正元年）、明治天皇御大葬の当日に妻と共に殉死、六四才だった。¹⁶ 乃木は必ずしも輝かしい戦績ばかりを残したわけではない。西南戦争では軍旗を奪われ、日露戦争では乃木の無策のために数万人の兵士が死んでいる。それでも乃木は軍神と呼ばれることとなる。そこには何があるのだろうか。

それには殉死という最後が大きいと考えられるだろう。明治天皇と共に殉死した乃木について、新聞の報道は人々に驚きをもたらした。『萬朝報』¹⁷は一面に記事を出し掲げているほどだ。軍神の誕生とされる廣瀬とは軍神になった経緯が異なる。廣瀬は戦績への評価と、自らの命を顧みず部下を案じて行動したその日本魂から一気に軍神との呼び声が高まったが、乃木は殉死が軍神になる大きな要因であったといえる。

二 『將軍』考察

次に、軍神と言われた乃木が『將軍』の中でどのように描かれているのか考察する。『將軍』の中で乃木は、章ごとに大きく異なる姿で描かれる。各章で異なる乃木像を考察するためにまず、「將軍」一章について、N將軍以外の登場人物の整理と、登場人物達

がN將軍に会ってからどう変化したのかについてまとめていく。

『將軍』一章での登場人物は田口一等卒・堀尾一等卒・江木上等兵である。

田口一等卒は徴集される前は紙屋であった。白襪隊に所属し将校達の敬礼で見送られることを名誉だと感じている人物であり、また馴染みの芸妓の物をもってのことから、死に急ぐようなことはないが覚悟を決めているいわゆる一般的な考え方を持っていると見える。N將軍に見つめられ握手をもらった田口は「殆ど処女のやう」な反応をみせ、あらためて自分の命は「御国のために捨てる」ものだと再認識する。ここで注目したいのは「御国のために」という再認識が、N將軍に会ったことでなされる点についてだ。つまりN將軍自身が「御国のため」という戦争期のイデオロギーを自覚化させるきっかけであったといえるのではないだろうか。

堀尾一等卒は徴集される前は大工だった。田口一等卒とは対照的に「御国のために」は「嘘つ八」であると悪態をつき、「御国のために」という思想に反発する人物である。しかし、反発していた堀尾一等卒までもが、N將軍と会ったことで変化をみせる。本文には將軍に手を握られ、「全身の筋肉が硬直したやうに、直立不動の姿勢になった」堀尾一等卒の姿が描かれる。この場面からは

明らかな緊張がみてとれる。次の場面では、「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのじゃ。」と言いつつ、それに苦笑した田口一等卒に対して「何かに済まない気」を起こす。ここで若干の心境の変化がみられる。最終的に堀尾一等卒は、突撃の最中に銃創を受けて発狂する。堀尾一等卒の最後の言葉、ここに堀尾一等卒の発狂の原因がはつきりとあらわれていると考えられる。彼の発狂は銃創の傷によるものではなく、「御国のために」という思想に反発する自分と、N将軍との邂逅によって「御国のために」死ぬことを「万歳」だと思っ自分との乖離が原因なのである。

江木上等兵は、元は小学校教師なので、ある程度の知識を持っており、田口一等卒と堀尾一等卒に比べて戦争の仕組みを分かっていたと考えられる。ここでいう戦争の仕組みとは、下級兵士たちのあずかり知らぬ所で将軍クラスの人々が下級兵士たちの命を決定していく、ということである。「おれたちは死ぬのが役目じゃないか？」ときっちり己の役割を認識しているが、「敬礼だけで」酒を売ることはないだろうという本文のセリフから、実際は「御国の為に」「国家の為に」死ぬことに拒否感を持つ江木上等兵の姿が分かる。そんな江木上等兵はN将軍との邂逅の後で「何のためだか知らないが、ただ捨ててやるつもりなのだ」と言う。ここで注目したいのは、「何のためだか知らない」点である。「御国のた

めに」ではなく、N将軍の何かに影響され、死ぬことを決意していると推測できる。ではその何かとはなんだろうか。江木上等兵は田口一等卒と堀尾一等卒がN将軍の握手によって死を意識したのを横で見ただけである。江木上等兵は教師であったことから、普段は統率をはかる為に声を出していたと考えられる。N将軍が握手一つで兵士たちの統率化をはかっていく姿は、教師であった彼にとって理想的な指導者として映ったのではないだろうか。

一章に出てくる三人の兵隊は、それぞれ立場や個性は違うが、N将軍との対面後に全員がそれぞれが考える「死」を意識しているということが分かった。三人はそれぞれ将軍に対してイデオロギーを自覚し、内面乖離で発狂するまでの統率を感じ、理想的な主導者をそこに見た。三人にとって将軍は、兵士たちの統率を握手のみではかり「死」を自覚させる、残酷なまでにカリスマ性を持った指導者そのものなのである。

次に第二章について考察していく。ここでは将軍と対照的に描かれる田口一等卒と、将軍に対しての心理描写が描かれている穂積中佐に注目したい。

二章で田口一等卒は、露探を捕まえた歩兵として登場し、将軍に殺せと命じられた露探を殺すことを戸惑う姿が描かれる。本文

の將軍に関する記述には、尋問を受ける露探に対しての「モノメニアックな眼の色が、殊にこう云う場合には、気味の悪い輝きを加える」様子が分かり、カリスマ性を持った指導者の姿とは異なるようである。その後の場面では、露探の情報資料の隠し場所を見抜き上機嫌になり饒舌になり、「軍司令官閣下の炯眼には驚きました。」等の記述で部下に氣を使われている様子も描かれ、將軍ゆえの驕りも見受けられる。將軍と邂逅したのにも関わらず特に心情変化のない田口一等卒から、二章での將軍にはカリスマ性は感じられず、ただの殺戮好きのモノメニアックな將軍としてあつたことが分かる。

次に穂積中佐について考察する。穂積中佐は軍参謀である。参謀という立場から考えて、戦争に理解があり、また知的で冷静な人物であると推測できる。露探斬首を見ていた彼はスタンダールの言葉を思い出す。スタンダールとは、社会批判と心理描写にすぐれた小説家であり、この言葉を心中で唱える穂積中佐もまた、社会批判的な心情であつたといえるだろう。つまり、ある程度の地位を持った將軍の裏には様々な殺戮が存在し、そのさまざまな殺戮の果てに自分たちの命が決定されていくという当時の社会システムに対する批判を彼はもつたのである。また、「ふと気がつけば彼の馬は、ずっと將軍に遅れていた。」という描写からは、穂積

中佐と將軍の心的、または思想的な距離感が表されているといえるだろう。以上のことから、穂積中佐から見た將軍とは、自らの社会批判的感情の中心にいる人物であり、理解できない殺戮者なのである。

以上、二章で將軍は、当時の社会システムによって將軍になつたにすぎない一人の殺戮好きなモノメニアとして描かれていることが分かつた。

第三章では、招魂祭で演劇を鑑賞する將軍と兵卒たちが描かれる。劇中、裸に近い男女が相撲をとる場面で將軍は激高するが、その後、国のために死ぬ巡査の幕を涙を流して賞賛し、將軍の顔は「以前より遙かに優しみを湛へて」いるものへと変化する。三章では、色事を嫌い、大和魂に感動してなみだを流す、まさに日本男児としての將軍が描かれている。

さらに詳しく考察するために登場人物のそれぞれの視点から將軍をみていく。將軍に対して心情が描かれる穂積中佐と、その彼と対照的に描かれる中村少佐に注目して考察していく。

穂積中佐は海外への留学経験がある。いわゆるエリートであり、外国の新しい考えを持っている人物であると推測できる。そんな穂積中佐は、忠誠心と愛国心がテーマになった劇を所望した將軍に対して苦笑をもらしている。このような点から考えて、外国の

新しい考えを持つ穂積中佐からすると、愛国心や忠誠心を涙を流すほど大切にしている将軍の考えは古く理解できないものなのである。しかし一方で劇を観劇して感動の涙を流す将軍を見て、「将軍は善人だ」「明るい好意をも感じる」などとも言っている。穂積中佐にとって将軍とは、古い価値観を大切にしているままの古い軍人であり、しかし同時に好意的にも思うなど、つかみどころのない人物としてとらえられていると言えるだろう。

次に中村少佐についてみていく。中村少佐は、穂積中佐とは対照的な人物として描かれている。将軍のことを尊敬している人物であるが、一方で細君のことを思い出し憂鬱になるなどしているため、将軍を尊敬しつつも一章の兵卒達のように命まで捧げる指導者であるとは思っていないようである。以上のことから階級的に敬意を払っているのだと推測できる。

三章では将軍は人懐こい笑みを浮かべそこにあり、大和魂を持った将軍として描かれている。しかし一方で穂積中佐からは、一部に好意はあるものの軽い侮蔑を含んだ様子で見られ、中村少佐からも階級に対する尊敬に留まっている。三章での将軍は単なる古い軍人である。

最後に第四章について考察していく。ここでの登場人物は中村少将と彼の息子のみである。二人の価値観の違いに注目して考察

していく。

中村少将について、壁にN将軍の肖像をかけていることから考えて将軍に対し大きな尊敬の念を持っていると分かる。中村少将のN将軍への尊敬が階級にとどまらなくなったのは何が原因なのか。そこにはN将軍の「殉死」があるのではないだろうか。この推測は第四章に二回印象的に登場する「レムブラント」によっても裏付けられる。レムブラントという画家の絵の特徴として辞典『画家事典』¹⁸⁾を引用する。レムブラントの作品は「一点(ないし複数の点)に暗闇に鋭く差し込むような光線が当てられ、その部分を強調すると同時に暗闇の部分の逆を強調する手法」から生まれる劇的な明暗表現ゆえに、「光と陰影の画家」と称される。中村は、二十年余りの歳月を経て少佐から少将へと階級を変えている。中村少将は、戦死しておらず生きのまま階級をあげているため、狡猾に階級をあげて来たのだと推測できる。「レムブラント」に見下ろされる中村少将もまた、光と陰影のある人間なのだ。

次に青年について考察していく。青年は文科の学生である。新しい価値観を持っている青年であり、将軍のことを過去の人物であるのとらえていることが推測できる。青年が、中村少将と対になるように新しい価値観を持っているとされるのは、将軍の肖像をレンブラントの絵にかけかえていることに特に顕著に表れてい

るといえるだろう。大正時代、若い世代はあくなき探究心を持って新しい時代を模索していた。だからこそ彼らにとって、異常なまでの探究心を持った画家レンブラントは親近感を覚える画家であった。また、レンブラントの自己の内面を描いた自画像が、彼らにとって親近感を覚える大きなきっかけであった。レンブラントは自己の内面に暗澹を見ていた。青年の学友が自殺していることから考えても、この時代の青年達が自己を突き詰め、内面に暗色な気持ちを抱えていたのは想像に難くない。青年はN将軍に対しては距離を感じているようである。暗澹たる気持ちで死んでいったレンブラントとは対照的に、N将軍は、神格化されることを見越した様な態度をとり、希望を持って死んだ、と青年は考えている。ここからは、内省的な深みは感じられず、感じられるのは表層的な外観のみである。N将軍には、自らを死に導くほどの内面の深みが見られない、と青年は考えているようである。だからこそ将軍は「遠い」存在であり、レンブラントはN将軍よりも青年達に近く「偉い画描き」であったのだ。

四章では、過去の軍人である乃木を敬愛しつつも無意識的に自らは先へと進んでいく中村少将と、意識的に先を求める青年とが対比的に描かれていた。暗澹たる気持ちを持った青年達は「レムブラント」に同じものを見、一方でN将軍には不信感を抱いた。

中村少将にとっては自らと同じ時代を生き、殉死という素晴らしい幕引きをした尊敬すべき軍人として「ある」が、青年の中には「ない」ままであり、青年にとってN将軍は過去の軍人にすぎないのだ。

結論

本稿では芥川龍之介『桃太郎』についてこの物語から何が読み取れるのかを考え、そこから日本人の戦争観について考察した。さらに『将軍』について、戦争に関する様々な批判を盛り込んだ物語として再考してきた。

一章では芥川龍之介『桃太郎』についての読みを深めた。『桃太郎』は人間が正義であり鬼が悪であるといった勧善懲悪的展開とは全く異なるものである。『桃太郎』には明確な善と悪が存在しない。お爺さんお婆さんはいつまでも労働者であり続け発展せず、桃太郎は帝国主義と植民地主義を振りかざして鬼が島を侵略し鬼達を虐殺する。虐殺される鬼も人間差別の思想はあり、復讐の準備をしていることから、結局は桃太郎と変わらないのである。しかし、桃太郎に部下を率いる手腕があった事は確かである。だからこそ「英雄」になりえたのだ。今回の英雄は人側に生まれたが、次の英雄は鬼側に生まれるかもしれない。鬼側に英雄が生まれた

としよう。今度は人が虐殺され、その話が鬼が島で英雄譚になり、人間界では虐殺の歴史として語り継がれ、子供への脅しに使われ、語りつがれて行くことになるのだ。芥川は物事を俯瞰して色々な視点から日本を見ていたのだろう。桃太郎の帝国主義的な視点、お爺さんお婆さんの労働者の視点、そして虐殺される他国の視点で昔話「桃太郎」を読んだ時、そこには全く違う物語が浮かび上がったのだ。

英雄を作り上げるということについて、その意味と理由について詳しく考察したのが二章である。まず昔話「桃太郎」の成り立ちと話型から確認し、その変遷を辿った。成立直後は鬼が退治される話ではなく鬼を退治する英雄の話としてあったが、話型が分岐していくと「桃太郎」は村人の娯楽となっていた。その後文章に残されてからはさらに広く世に流布し、大衆の娯楽となった。そして「桃太郎」は国定教科書に掲載される。「セイバツ」の文字が追加され勸善懲悪の物語として生まれ変わった「桃太郎」は、戦意高揚のプロパガンダとして、国民の教科書として利用されたのだ。

では、現実世界において英雄となったのはどのような人物であったのか。三章では芥川龍之介『將軍』から読み解いた。芥川は『將軍』に戦争批判と乃木批判、そして乃木を神格化した周囲

への批判を落とし込んだ。乃木は確かにすばらしい司令官だった。しかし、その裏には多大な犠牲がある。乃木は神ではない。それを証明したのが『將軍』であったのだ。

乃木は神ではない。当たり前である。彼は様々な一面を持ったただの人間であったのだ。それを神に仕立てあげたのは日本人の戦争観であった。日本人は英雄を作り上げ心酔し、付いていくことで統率をはかる。それは「桃太郎」にも表れている。読者はお伴と同じように一步引いて桃太郎を眺める。それこそが日本人の戦争観であり、「英雄」を生み出す理由であるのだ。人は完全なる英雄にはなれない。英雄は作られるのである。

注 (1) 久保田芳太郎・関口安義『芥川龍之介事典増訂版』(明治出版、一九八五年)

- (2) 関口安義『芥川龍之介新辞典』(翰林書房、二〇〇三年)
- (3) 岩崎宗治『世界シンボル辞典』(三省堂、一九九二年)
- (4) 大和謙二『日本神話辞典』(大和書房、一九九七年)
- (5) 柳田國男『口承文芸史考』(講談社学術文庫、一九七六年)
- (6) 中村元『広説佛敎語大辞典』(東京書籍株式会社、二〇〇一年)
- (7) 柳田國男『桃太郎の誕生』(三省堂、一九三三年)
- (8) 滑川道夫『桃太郎像の変容』(東京書籍、一九八一年)
- (9) 芥川龍之介『澄江堂雜記』(筑摩書房、一九七一年)
- (10) 文学批評の会『批評と研究 芥川龍之介』(芳賀書店、一九七二年)

- (11) 菊池弘『芥川龍之介辞典』(明治書院、一九八五年)
 (12) 『名著復刻芥川龍之介文学館』(日本近代文学館、一九七七年)
 (13) 張蓄『芥川龍之介と中国―需要と変容の軌跡―』(国書刊行会、二〇〇七年)
 (14) 秦郁彦『旧日本陸海軍の生態学』(中央公論新社、二〇一四年)
 (15) 『東京朝日新聞』一九〇四年三月三十日
 (16) 佐々木英昭『乃木希典予は諸君の子弟を殺したり』(ミネルヴァ書房、二〇〇五年)
 (17) 「萬朝報」一九二二年九月一四日
 (18) 田辺幹之介『画家事典』(玄光社、二〇一四年)

〈参考文献〉

- 新谷尚紀『和のしきたり 日本の暦と年中行事』(日本文芸社、二〇〇七年)
 伊藤整『日本現代文学全集五六芥川龍之介集』(講談社、一九六〇年)
 池藤五郎『古文献を基礎とした桃太郎説話の研究(上)』(立正大学文学部論叢、一九六七年)
 一之瀬俊也『米軍が恐れた「卑怯な日本軍」 帝国陸軍戦法マニュアルのすべて』(文芸春秋、二〇一二年)
 稲田浩二『日本昔話辞典』(弘文堂、一九七八年)
 今泉定介・須永和三郎編『尋常小学校 読書教本』(普及社、一八九四年)
 海老井英次『芥川龍之介論考―自己覚醒から解体へ―』(桜楓社、一九八八年)
 大濱徹也『乃木希典』(講談社、二〇一〇年)
 門脇禎二『吉備の古代史 王国の盛衰』(日本放送出版協会、一九九二年)

年)

- 小池正胤『江戸の絵本4 初期草双紙集成』(国書刊行会、一九八九年)
 鈴木三重吉『古事記物語』(精興社、二〇〇九年)
 関口安義『芥川龍之介とその時代』(筑摩書房、一九九九年)
 関口安義・庄司達也『芥川龍之介全作品事典』(勉誠出版、二〇〇〇年)
 関敬吾『日本昔話大成』(角川書店、一九七八年)
 関敬吾・小澤俊夫『日本昔話の型』(小澤昔ばなし研究所、二〇一三年)
 関根栄郷『芥川龍之介』(筑摩書房、一九九一年)
 鳥越信『桃太郎の運命』(ミネルヴァ書房、二〇〇四年)
 中村修也『日本神話を語ろう イザナギ・イザナミの物語』(吉川弘分文館、二〇一一年)
 野村純一『新・桃太郎の誕生 日本の「桃ノ子太郎」たち』(吉川弘文館、二〇〇〇年)
 平野清介『新聞集成 芥川龍之介像一』(明治大正昭和新聞研究会、一九八四年)
 布川角左衛門『現代日本文学大全 芥川龍之介集』(筑摩書房、一九六八年)
 藤井駿『吉備津神社』(日本文教出版、一九七三年)
 船坂弘著『血風二百三高地』(潮書房光人新社、二〇一五年)
 文学批評の会『批評と研究 芥川龍之介』(芳賀書店、一九七二年)
 松澤信裕『新時代の芥川龍之介』(洋々社、一九九九年)
 松下芳男『乃木希典』(吉川弘文館、一九八五年)
 文部省『尋常小学國語讀本卷一』(日本書籍株式会社、一九一七年)
 柳田国男『定本柳田國男集第8卷』(筑摩書房、一九六二年)
 渡辺淳一『静寂の声―乃木希典夫妻の生涯』(角川書店、一九九七年)
 (二〇一九年度卒業)